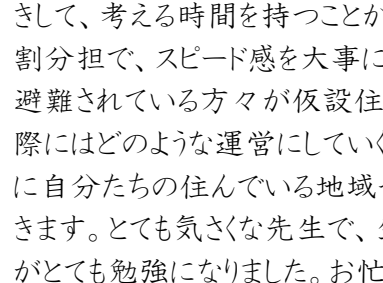


1月19日に環境防災科1年「災害と人間」の授業に元宮城県立石巻西高等学校校長の齋藤幸男氏が来られ、避難所運営



にかかる講義をされました(2限目は環境防災科2年の授業で講義、3限目は3年生と懇談をされたようです)。本校には何度も足を運んでいただき、卒業生も話を聞かせていただいております。東日本大震災の経験から来る備えや考え方など発信していくことに使命を感じておられ、本校環境防災科にも大きな期待を寄せていただいています。避難所毎に課題が違うので、行政の縦割りの考え方ではそのときに必要なことへの対応にスピード感がないからどうすれば良いかという課題を投げかけられ、生徒たちはスマホを持ち込んで当時の避難所や学校再建などに積極的に関わられた方々の話を動画でまとめたものを授業中に見聞きして、考える時間を持つことができました。避難所の組織図は蜘蛛の巣状の役割分担で、スピード感を大事にしないと必要なものがどんどん変わってきますし、避難されている方々が仮設住宅などに出て行かれてメンバーが変わっていった際にはどのような運営にしていかなど実際の場面で考えなくてはなりません。さらに自分たちの住んでいる地域や学校周辺に当てはめて考えることも大事になってきます。とても気さくな先生で、生徒たちにも思いを伝えられるのが上手で私自身がとても勉強になりました。お忙しい中ありがとうございました。

21日には、個人的にはありますが、大川小学校裁判にかかる記録として映画化された『「生きる」大川小学校津波裁判を戦った人々』を見に行きました。昨夏の「防災ジュニアリーダー被災地ボランティア活動」の際にお世話になった今野様ご夫妻も登場されておられました。参加生徒たちはその声を直接聞くことができたと思いますが、私たちにはあまり伝わっていなかった内容もあったので、複雑な思いで見ました。私自身も東日本大震災から2年後の2013年3月に一度、南三陸を中心にしながら大川小学校にも足を伸ばして見に行きました。「なぜあれだけ多くの児童が、教員が津波に巻き込まれたのか」「高台に逃げることはできなかったのか」など当時の情報からは伝わらないことも多く、実際に見に行っても急な斜面を駆け上がることは難しいだろうと思っていたのが、授業でも登ることもあったと聞くと「なぜ」の思いは残ったままでした。自分が管理職で指示を出すとしたらどうしていたのか、時間との勝負の中でどう動けたのかなど多くのことを考えました。「学校が子どもの命の最期の場所になってはならない」という裁判官の言葉はとても重いものがあります。そして、防災に関して、危機管理に対しての学校への要求は非常に高くなったと思います。災害が起こることは避けられないと思いますが、いかに被害を少なく、亡くなる方を少なくできるかは考えておかねばなりません。裁判で戦った皆さんも、「裁判することは本意ではない、お金が目当てではない、真実が知りたい」と言われていますが、「お金目当てに」と誹謗中傷されたり、裁判の期間も長くなることから疲弊されたり大変な思いをされてこられたようです。私も自分の子どもが同じような状況で亡くなったとしたらどう考えていたのかということも考えました。映画を見終わって、学校に勤務するものとして、危機管理及び大事が起こったときの判断の大切さ、そして説明責任、伝え方など今後もしっかりと考え実践していかなければならないと思いました。

15日から19日までEARTH隊員として珠洲市の飯田高校に入っていた小寺先生が戻ってこられました。避難所運営ではなく、教職員の心のケア、学校再開に向けた動きなどを支援する形で避難所となった学校で避難された方や当該校の先生方と向き合ってこられたようです。本校にとっても貴重な経験をしてくださりました。この経験を私たち教員に伝えていただきながら、現場で必要なこと、考えておかねばならないことなど生徒たちにも伝えていただけたと思います。本当にお疲れ様でした。

1月下旬になり、日の入りが遅くなってきました。寒い日は続きますが、春に向けての準備を進めていきましょう。